

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 5 月 29 日現在

機関番号：32675

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720107

研究課題名(和文)近世初期観世流謡本刊本変遷過程をめぐる研究－玉屋本の書誌的研究を中心に－

研究課題名(英文)Study of Tamaya utaibon

研究代表者

伊海 孝充 (IKAI, Takamitsu)

法政大学・文学部・准教授

研究者番号：30409354

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、江戸時代初期に刊行された観世流謡本三系統のうち、これまでほとんど研究されてこなかった玉屋謡本の特徴について検討し、いくつかの新見をえることができた。主な成果は、古活字玉屋本の本文をもとに整版玉屋本が刊行されたが、両者は同系統とはいえない差異があること、古活字玉屋本の詞章内容は光悦謡本というべき本であり、決して「玉屋本」ではないこと、これまで「玉屋本系」と捉えられていた謡本は卯月本周辺で書写・刊行された謡本と比較した上で、その性格を捉え直す必要があること、などが挙げられる。いずれも従来の観世流謡本刊本史の再考を迫る重要な指摘であると考えている。

研究成果の概要(英文)：In this study, out of the three types of Kanze-ryu utaibon that have been published in the early Edo period, I were analyzed for Tamaya utaibon, and it was possible to get some new opinions. The main achievement is three. The first is that based on Kokatuji-Tamaya utaibon Seihan-Tamaya utaibon was published, both that can not be said to be the same type. The second is that Kokatuji-Tamaya utaibon is a book to be called "Koetsu Utaihon", and that it is not "Tamaya utaibon". The third is that previously Utaibon that were regarded as "Tamaya utaibon type" is necessary to reconsider the distinction, by comparison with Genna dukibon and same type utaibon. I believe that these opinions is an important point for Kanze-ryu utaibon history.

研究分野：能楽

キーワード：能楽 謡本 書誌学

### 1. 研究開始当初の背景

観世流謡本は江戸時代初期に大きく変化したが、この時代に刊行された謡本は光悦謡本・玉屋謡本・元和卯月本の三系統があると把握されてきた。光悦謡本と元和卯月本に関しては、先行研究も多く、それらを底本に用いた謡曲集も刊行されているが、残りの玉屋謡本については、観世流謡本史の中で言及されることはあっても、詳しく研究されることはなかった。とくに、戦後の研究としては、表章の研究(『鴻上文庫本の研究』『図説光悦謡本』)の中で、特に光悦謡本との比較の中で言及されるに留まっている。しかし、光悦謡本と元和卯月本の研究だけでは、江戸時代初期に観世流謡本がどのように変化し、その変化に誰が関与していたかを明らかにすることはできない。今後、この研究を発展させるためには、この兩種本以外、とりわけ玉屋謡本の研究も不可欠である。

### 2. 研究の目的

本研究では、玉屋謡本の書誌的分析を通して、観世流謡本の詞章の変遷と刊行背景の一端を明らかにするものであった。慶長～元和頃は、謡本の出版が始まった時期であるだけでなく、観世流謡本の詞章が大きく改変され、現行の形に整った時期であり、観世流謡本の歴史を考える上で重要な時代である。この時代に刊行された主要観世流謡本には、光悦謡本・玉屋謡本・元和卯月本があるが、前述のように玉屋謡本に特化した研究は皆無に等しい。

本研究で玉屋謡本の特徴が詳らかにすることによって、光悦謡本・元和卯月本の研究だけでは明らかにならなかった観世流謡本の変遷の様相が、より具体的に把握できるのである。また、一部の整版玉屋謡本には、観世黒雪の章句を写した旨を記した印が押されている。江戸初期にはこうした謡本が多いので、玉屋謡本を詳細に分析することによって、「身愛本」「黒雪本」の実態がより具体的に把握できると期待される。

また、玉屋謡本は後代の「寛永中本」と呼ばれる廉価版の謡本に影響を与えたと考えられてきた。こうした謡本との影響関係を検討することによって、より広い視野から観世流謡本の変遷をたどることができる。

### 3. 研究の方法

本研究で行なったことは、以下の6点である。

#### (1) 玉屋謡本伝本調査

玉屋謡本は報告されている伝本が少なく、かつて報告された本の所在がわからなくなってしまっている場合もある。玉屋謡本の特徴を明らかにするためには、より多くの資料を収集する必要がある。今回の研究では、古典籍を多く所蔵する機関を訪問し、伝本現存

状況を実地調査することを大きな主眼としている。

#### (2) 玉屋謡本伝本間の比較調査

古活字玉屋謡本と整版玉屋謡本とが直接的影響関係にあることは知られているが、その実態は必ずしも明確になっていない。また、整版本は4種あるが、その関係も把握されていない。これら进行分析することが不可欠である。今回の研究では、古活字本・整版本を全種比較することで、従来の研究よりもより具体的に各種本の差異を把握することを目的としている。

#### (3) 光悦謡本・元和卯月本との比較調査

従来、玉屋謡本は「光悦本と卯月本の間格的性格」と言われていたが、その実態は明らかになっていない。先行研究を読む限り、一部の曲を比較し、その結果をこの3種の謡本の差異として敷衍して論じられていると想像される。

一番綴の謡本は、一曲ごとに本文系統が違う可能性もあり、厳密を期すためには、すべての曲を比較する必要があるが、大変時間と労力が必要である。今回の研究では、この作業を徹底的に行ない、揺るぎのない調査結果を得ることも目的とする。

#### (4) 寛永中本との比較調査

玉屋謡本が江戸初期の観世流謡本の三系統の一つに数えられるのは、この本が後代の謡本に影響を与えるほどの勢力をもっていたと考えられてきたからであるが、その実態が明らかになっているわけではない。

今回は玉屋謡本系の主要本と言われている寛永中本と比較することによって、後代の影響を考察したい。

#### (5) 他の古活字本との比較調査

玉屋謡本がそのように呼ばれているのは、一部の整版本に「玉屋」という刊者の名前が見えるためだが、この玉屋については何も明らかになっておらず、この本の制作環境は判然としない。そこで、注目したいのが古活字本の活字である。

古活字本は他ジャンルの本と同じ活字を用いている例も少なくない。活字の利用状況を把握することができれば、その本の制作環境を知る上で重要な手がかりとなる。古活字玉屋本の活字に注目し、同じ活字を用いている刊本を調査することによって、出版背景が明らかになると期待できる。

#### (6) 玉屋謡本の翻刻

光悦謡本と元和卯月本には翻刻があり、様々な研究に利用されているが、玉屋謡本にはそれが無い。これまで多くの能楽研究者に玉屋謡本の翻刻の必要性が叫ばれてきたが、まだそれが実現していない。今回の研究ではそれを作成し、公にすることで、今後の能楽

研究に大きく寄与できると考える。

#### 4. 研究成果

研究成果を以下の6点にまとめる(番号は「3.研究の方法」に対応)。

##### (1) 玉屋謡本の伝本調査

今回、多くの機関を調査し、玉屋謡本の現存状況を調査したが、新伝本の発見には至らなかった。しかし、これまで能楽研究では所蔵先を把握することができなかった伝本の所蔵先を突きとめた。

1960年東京古典会目録「紀念善本図録」に掲載されている整版本95冊が上野学園大学日本音楽史研究所、下田益三旧蔵本の整版本2冊が東京都立図書館に所蔵されていることがわかり、写真撮影を行なった。また、その資料は原本調査を行なった上、写真を用いて詳しく分析をし、論考の中で紹介できたことが大きな成果と考えている。

##### (2) 玉屋謡本伝本間の比較調査

計画どおり、玉屋謡本伝本を全曲比較したが、結果、古活字玉屋本と整版玉屋本の間には、従来考えられていた以上の差異があることがわかった。またその差異が本資料の位置づけを再考する重要な材料になることが判明した((3)参照)。ただし、節付に関して、今後さらに音楽的な見地から分析する必要があると考えられる。この点については別の研究を検討している。

整版玉屋本は、上野学園本の発見により、より豊富な材料を集めることができたので、先行研究よりもよりよい環境で研究することができた。

従来の研究では、無印本・墨印本・朱印本・寛永玉屋本の4種があると考えられてきたが、同種本内にも異同が存在することから、印は刊行後に何らかの事情で押されたもので、整版玉屋本の「種類」を分けるための基準になり得ないことを明らかにした。

##### (3) 光悦謡本・元和卯月本との比較調査

計画どおり、玉屋謡本と光悦謡本・元和卯月本とを全曲比較した結果、以下の2点の重要な成果を得た。

古活字玉屋謡本は、「玉屋本」と呼ぶべき本ではなく、光悦謡本系統の詞章をもつ本であることが明らかになった。

整版玉屋本は元和卯月本をもとに一部の詞章を改訂し、さらに独自の本文を僅かながらもつ本であるといえる。

この指摘により、これまで江戸時代初期の観世流謡本は三系統あり、その一つが玉屋謡本であるという見方は再考する必要がある、という重要な結論を得た。この成果は、単に玉屋謡本の特質を把握できたことではなく、観世流謡本史の再考を迫るものであると自

負している。

##### (4) 寛永中本との比較調査

玉屋謡本の後代の影響を理解するために、島原松平文庫蔵黒雪謡本と寛永中本を比較した。

黒雪謡本は整版玉屋本と同系統といえる資料であった。つまり、「玉屋謡本」といふべき系統があるとすれば、それは「黒雪印本」と呼ぶべき系統であるといえるかもしれない。その点は今後も継続的に調査・研究していきたい。

寛永中本は、玉屋謡本系と考えられていたが、今回の調査で一曲ごとに事情が異なることが明らかになった。これにより、後代の謡本に「玉屋謡本系」という確固たる系統が存在しないことが明らかになった。

##### (5) 他の古活字本との比較調査

今回の調査では、光悦謡本をはじめとする嵯峨本・川瀬一馬『古活字版之研究』掲載の主要古活字本の使用活字を調査した。しかし、古活字玉屋謡本と同じ活字は発見できなかった。今後、調査範囲を広げることで、同じ活字を発見できる可能性もあるので、調査を継続したいが、玉屋謡本の活字の孤立性も考えていく必要がある。

##### (6) 玉屋謡本の翻刻

今回、古活字玉屋本を30曲ほど翻刻している段階で、この本が光悦謡本系であることが判明し、この翻刻はほとんど価値がないことがわかった。今後、整版玉屋本の翻刻を検討したい。

以上、6点の成果を得られたが、今後さらに研究を継続する必要がある。とくに、観世身愛関係の謡本との関係を詳しく分析する必要があると考えている。

なお、今回の研究成果は法政大学能楽研究所紀要『能楽研究』に3~4回(その内1回はすでに掲載済)に分けて発表する予定である。次回2015年度7月に刊行予定。また、今秋開催予定の謡本シンポジウムにも登壇し、今回の研究結果を踏まえた発表をする予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

伊海孝充、「玉屋謡本の研究(一)-玉屋謡本諸本との関係をめぐって」、法政大学能楽研究所、査読無、38号、2014、1-34

〔学会発表〕(計1件)

伊海孝充、「玉屋謡本考-古活字本と整版本との関係をめぐって」能楽学会例會、

2013年9月24日、於法政大学(東京都千代田区)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

伊海 孝充 (IKAI, Takamitsu)  
法政大学・文学部・准教授  
研究者番号：30409354